

ロータリアンになつて

どんな得(とく)があるか?

「君はロータリアンだね、ロータリーに入会するのはむずかしいそうだが、ロータリーの会員になれば、いつたい、どんな得(とく)があるんだい?」

そう言つた、ごく率直な問いを、よく友人から聞かされる。こんな場合、ノンロータリアンのインフォメーションの機会をつかむ意味で、相手の知識や性格に應じて、適切な答えが出来るよう、あらかじめ準備しておく心がけがありがたいものだと思う。だが、このお答えはそう簡単ではない。このノンロータリアンに對して、先方が納得してくれる簡易な言葉で説明し得るようになれば、一人前のロータリアンだと謂えよう。

この、会員以外の友人にロータリーの利点を巧く説明して聞かせるには、先ずロータリアンとしてこの問題と取つ組み、十分な認識や自覺と言つたものをつくつておく必要がある。そこで、問題をロータリアンとしての解釋から發足して見たいと思う。

こゝろみに、ロータリーの小バイブルとも謂える「ロータリー問答」をひろげて見る。

1950年版には「問」の「七」に

「ロータリー・クラブの会員となることによつて、どんな利益がありますか?」と、是に提供した問題と全く符節を合せる「問」が掲げられ、そして、その返答として「知己となるべき人々との知合いを擴め、親睦を増し、又永い友情を發展させることができること。人の餘り通らぬ心の通い路を歩む刺戟を受けられること。他人の仕事、問題及び成功によつて示唆を受けること。自分の商業又は専門的職業についての廣範な見通しをつかむ機会が得られること。自己の都市をより一層住みよいものにするため活動に、更に効果的に参加する機会が得られること」と書かれている。

これが1952年版では、同じ「問」は消えてなくなり、似たものが問の「九」に

「ロータリー・クラブの会員には、どんな特典が伴うか?」が出ています。「問」の意味が異つてはいるが、参考

のために「答」を書いて見ると、

「自己のクラブに於て資格確實なるロータリアンは次の特典を有します。即ち、ロータリーの徽章を佩用すること。自己のクラブの集會に出席する外、他の全ロータリー・クラブの例會に出席すること。自己のクラブの活動及びプログラムに参加すること。自己のクラブの會員との間に友情を温め親交を結ぶ外、地區大會、都市連合會、國際大會等に出席することによつて、限りなき範圍に實際を擴めることができます。」

この、50年版の「どんな利益があるか?」が、52年版では「どんな特典が伴うか?」に變えられたのには、相當な理由があることゝ想像される。

「特典」とすれば、ロータリーを主體として、具體的に、これこれと列記出来るが、「利益」となると、會員側の主觀が加り、勢い抽象的にならざるを得ない。50年版の中に「人の餘り通らぬ心の通い路、云々、」の一項が書かれている所など、抽象的表現の尤たるものと謂えよう。

抽象的なものゝ言い方は深遠な響をもつが、具體的につかみ難い場合もあり、どうかすると、とんでもない解釋が出て來たりする。そうした豫防の爲めかどうか知らぬが、52年版では抽象が姿をひそめたようである。このことは、疑問解決の爲の手びきとしての「問答」として、一應無難になり、結構なことだと思う。

とは言うものの、「どんな利益があるか?」は、その問いの當否、答の難易はさておき、最も平易直截的に屢屢口に出る問いである。だから、「問答」とは別箇の問題として、検討して見たいと思う。

こゝで一つ断つておきたいのは、「問答」に書かれてある幾つかの利益とか特典とかに就いて、皆様もよく御存じのことだから、こゝで云々するのを止め、甚だ欲の深い話だが、何か外に、もつと有り難いものがないかを捜して見たい。あれば儲けものであり、そこに又、大きな興味が湧くわけだ。

だいたい、人事百般、その仕事に魂を打ち込むと、有り難味味が滲み出して來るものだ。鰯の頭さえ、一心こ

京都 R C 茂 地 庵

めて拜めば後光がさすそうだし、一撞の鐘の音も、諸行無定、煩惱菩提などゝ觀じ得るのだから、至極巧妙に仕組まれたロータリー機構の中において、數年間忠實にロータリーに溶け込んで働いて見ると、「問答」に掲げられたような有形的なものゝ外に、もつと深いものが摺めぬ筈はないのである。人生觀に明るさ温かさを與え、人生行路に愉しいオアシスを見出す等、無形的ではあるが、宏大な、それこそ汲めども盡きぬ無限の利益が得られるであろう。これがロータリーの醍醐味だと謂える。

醍醐味のことだから、こゝ迄ゆけばもう卒業と言うものではない。心が次第では數年で有り難味が出ようし、何年たつてもそれ程に感じられない場合もあろう。

だが、こう言つただけでは、餘りにも抽象的で、風呂敷の揚げつ放しになるから、一つ例をあげさせて貰うことにする。

サーヴィスを看板にしているロータリーだから、サーヴィスのお稽古には恰好の道場である。そのサーヴィスが身につけて、習性となると、サーヴィスが愉しみになり、やらずにおれなくなる。よく「縁の下の力持ち」と言つて、人目につかぬ、莫迦らしい行爲と言われるものに興味を覺えるようになる。

この「縁の下の力持ち」をやるのが愉しくなり出すと、世の中は實に明朗になり、その人の關係している團體、社會などから有爲の人物として尊敬されることになる。こゝに多くの有形的な利益が得られるであろうが、それは、謂わばどうでもよい副産物であつて、「縁の下の力持ち」をやりたくなつたことに有り難味があり、感謝すべきだと思う。

この一例はほんの九牛の一毛に過ぎない。多くのロータリアンは、もつともつと適切に澤山な利益を感得してられるにちがいない。

「ロータリアンになつて、どんな得があつたか?」について、良いお話を聞かせて戴きたいものである。

ロータリアンになつて



どんな

前號で、あれこれと、甚だとりとめのないことを申しあげ、皆さんは定めし「何のたわごとを！」と思召されたでしょう。それをよく承知しながら、も一度押し強く、この問題と取つ組んでみたいのが私の悲願とでも謂いますか。御迷惑の點はロータリアンのよしみで、御勸辯をお願いします。

このまえ、あまりにも抽象的な、雲をつかむようなことを述べ、そしてそのままになつたので、少々あと味がすつきりしない。尤もロータリーの無形的な有難味は全く廣大無邊で、後日今一度觸れて見たいとも思うし、私の「たわごと」がさそいの水ともなつて、皆さん方の御體驗や御考察に就ての、いゝ原稿を戴くよすがともしたいと、ひそかに念願してゐる次第です。

そこで今日は、具體的なものを取り上げてみることにします。

「ロータリー機構の移植」

ロータリーに溶け込むには、その巧妙を極めた組織や活動の機轉を充分に呑み込まねばならぬのは、こゝに改めて申しあげる迄もないことで、それにはロータリーのいろんな文獻を涉獵する必要もあろうし、種々なロータリーの活動に参加して、そこに生じた疑問を、單なる常識でなしに、文獻や先輩の正しい解釋によつて、解決して行かねばならぬ場合もありましょう。

「求めよ！然らば與えられん」で自ら進んで、ロータリーの仕事に没頭してゆくところに、機構に精通する捷徑が見出されます。

偕てこの得たる知識を、我々が關係している團體に移し植えて、ロータリー式にやつて見ると、仕事が能率的になり、實に愉快に運営されるのに驚かされるのです。

一例として、私は醫科大學の臨床科に勤めていますが、その教室には70人ばかりの醫員が醫療と其研究に勤んでいます。だが、この大學の教室と呼ばれる機關には、醫療やその研究以外に、いろんな仕事がある。講義のための準備、圖書や記録の整理、醫療用や研究の機械器具の整備、標本の整理、等々。でこれ等の事務的な仕事も、古參の醫員がそれぞれの係りとなつて運営している。

この教室の事務の係りは、從來1人宛でやつていたのだが、こゝへロータリーの委員會制を持ち込み、教室の仕事はそれぞれのコミティーで運営するとし、從來の係りは委員長となり、教室員全部を各委員會に割り

得があるか(其二)

京都 R C 茂地庵

當て、新に教室員となつた者もその翌日から何かの委員會に配屬され、係り長即ち委員長はこの新入者をよくインフォームしてゆくと言つた、全くロータリー式委員會制を採用し、實行して見た。勿論1年交代制である。

この新規のシステムが軌道に乗つて、スムーズに動き出すには相當な時を要した。それはその筈で、ロータリーでも各委員會が理想的に動き出すにはやはり時があるのだから。

ひとたび、この機構で調子がつくと、仕事は實に圓滑に、進歩的に發展してゆく。全醫員が教室の運営に参加し、その一翼を担うのだから、教室の發展に關心と理解を持ち、仕事に熱と愉しさをもつようになった。

今ひとつ

「スピーチが上手になる」

ロータリーでは、當てられたら最後、いつでも立つてスピーチをやることになつてゐる。だが、何の用意もせずにて、指名されれば當意即妙の話が出来るような人物は稀れだと謂える。勢い平素から準備しておかぬと、咄嗟の場合に恥をかく。それで、一つはロータリーに關する所感、もう一つ自分の職業に就ての話、先ず二つ程を常に準備しておくのが賢明である。

私は特別話が下手で、準備なしでは何も言えないたちだから、特にその感が深い。原稿を書いて幾度も訂正し、電車や汽車の中で暗誦もし、言い廻しも工夫する。いつ當てられると決つていないスピーチの練習は、少々莫迦氣にいるようだが、スピーチの上手な人は人に知られぬ準備があるに違いないと思う。俚諺にも「生れつきの名人はいない」と言う。その通りである。こうした練習が度々重なると、下手なりに話が段々板について来る。

この實例を、今年の正月に日本へ來られたブルニア R I 前會長も大阪 R C での歡迎會で語つておられた。

ブルニア君は生れつきの恥しがりで、人の前でスピーチをやるのが一番苦手だつたそう。それが立派なスピーチが出来るようになったのは、全くロータリアンになつたお蔭だと言つておられた。

巧言令色は人の賤む所と言うが、お間違えないう。自分の想う所を正確に、そして聞き手にいやな感じや堅い氣持を與えずに、愉しく聞かせることは、世を渡る上で、殊に皆様方のような社會の重用な地位におられる方には大切なことですから。

ロータリアンになつて

どんな得(とく)があるか?(其三)

京都 R C 茂地庵

「佛の顔も三度」と言うから、こんどは皆さんもソツポをむかれるだろう。だが、「石の上にも三年」とも言うので、今1回御辛ばうをお願いしたいものです。

高野辰之氏作歌の日本ロータリー歌に、「心を合せて争い思むを……」の文句のあるのは皆様御存じ。ロータリーはどこ迄も平和禮讓で、時には正邪を超越し、一見卑屈な事なかれ主義のように思われもするが、靜に考えて見ると、争いはどんな場合でも正しいとは思えない。釋迦もキリストも廣い愛と滅私と感謝の心を基にして、争いを否定している。

悲しいことに、現在は餘りにも争が多い。いろんな面で摩擦がある。人事百般思うにまかせぬのがこの世である。殊に敗戦後、國が疲弊して金廻りが悪くなるにつれ、愚痴も多くなり論争も烈しい。それがうつし身のかなしさだと謂えないでもないが、争わなくてもよさそうだと思う小事に、目角を立てて論争しているのをよく見かける。

その昔、白居易が「蝸牛角上争何事。石火光中寄此身。隨富隨貧且歡樂。不開口笑是癡人。」と達觀した七絶は尙お以て現代の警句ともなり得ましよう。

意見の具陳と論争とは、時に紙一とえの隔りしかない場合もあるが、ロータリアンになつて以來、私は意見は述べるが、論争はやらないことに決めました。靜觀すれば、どちらへころんでも大したことでない論争が多く、又論争の結果、自説が否定されれば勿論、たとい自説が容れられても、決してあと味は感心しません。激論を戦わせた日は、勝ち負けに拘らず、睡眠を妨げられることさえあり、保健上甚だ面白くありません。

同じような意味で、「腹を立てないよう」にしたいものです。ロータリアンになつて、「争をしない」と同様に「腹を立てない」習慣が養われたら、それこそその公徳は實に測り知れないものがありましよう。處世の

ためばかりでなく、腹を立てないことは無病長壽の無二の妙藥だからです。

犬は何よりも好んで牛肉を食べる。ちよつとした犬の病氣は牛肉を喰せば治るとさえ謂われている。見てみると、それ程咀嚼もしないが、充分な消化液が分泌されて、肉はよく消化され吸収される。ところが、肉を喰つている最中に、犬の嫌いな猫の姿を見せると、犬は怒を發し、途端に消化液の分泌は著しく減退し、消化、吸収は悪くなる。これは有名な生理學者パウロフの實驗だが、その實證を聴く迄もなく、心配ごとがあると食事が進まないのを誰れしも経験している。

人生、愉しい氣持で食事するのと、腹を立てながら物を食うのとでは、食つたものの利用價值に著しい差が現れる。それが日常の生活に影響するのだから、一寸やそつとのビタミンの注射や服薬の効き目などは比較にならぬ蓄積効果が現れる。長生きしたい人は腹を立てぬ習慣を養うのが最良の捷徑とも謂えましよう。

この「腹を立てない」を更に一步進めて、「笑おう」と言うのが亦ロータリーの狙いである。「童心にかえれ」「無邪氣に」「朗かに」「ユーモラスに」「茶目氣を出して」などと、いろんな言葉が使われている。それはその筈で、ロータリーがシカゴ市に誕生した時、當時惡評に満ちた砂漠の如き市の中に、愉しいオアシスを創り出そうとしたのが、その目的の一つであつたのだから。

たとい、日常の生活や仕事に割り切れぬ不愉快がある場合でも、ロータリーの例會に出れば朗かな氣持になり、食事もうまく戴ける。例會日が待ち遠しい。そんな風に例會が仕組まれておれば、缺席する會員はおのずからなくなり、出席獎勵委員は手もち無沙汰で困ることでしょう。